



松
風
日
記

希
世
珍

二

特別
~13
4268
2





あうしととをやうふちりまさり。綻^{はな}まどまころり櫻花^{はな}ど
 もの梢^{こぎ}のかざりまざりかく見えて。今^{いま}一入^{いっしゅ}の真^{まこと}かそへさ
 せたすふ菊池^{きくち}殿^{どの}とどめ簾^{すだ}子^こが隔^へて。御^{おん}透^と見^みあらせら
 せし不^ふど、何^{なに}とやらん水月^{すいげつ}鏡^{きやう}花^かの御^{おん}みちちふていと眺^{なが}め
 うくおぼしけるふいゆ阿^あ蕪^わ松^{しょう}がいらとやく心^{こころ}はきき薫^{かほ}
 ぬまっせしその才^{さい}の敏^みしたは御^{おん}感^{かん}賞^{しょう}ありける。長老^{ちやうらう}を
 おぼえど如意^{にぎ}もて膝^{ひざ}かうちさてし宮^{みや}城^{じやう}氏^ぢの子^こハ希^{まれ}代^{しろ}
 の才^{さい}人^{じん}うかと。頻^{あま}々^ま称^な賛^{さん}して止^とたまはず。とまどかか坐^ざ中^{ちゆう}に
 はいまだその意^いが解^げしえざる面^{おも}持^{もち}をふそ。長老^{ちやうらう}御^{おん}前^{ぜん}に
 對^{たい}ひて。君^{きみ}候^{こう}知^ち名^なぶとく。唐^{たう}の白^{はく}樂^{らく}天^{てん}が遺^い愛^{あい}寺^じ鐘^{しゆ}歌^か枕^{まくら}聽^き
 香^{かう}爐^ろ峯^{ほう}雪^{せつ}撥^{はく}簾^{れん}看^{かん}とつゝ絶^{ぜつ}唱^{てう}あり。天^{てん}朝^{てう}ふてはいづまの天^{てん}子^し



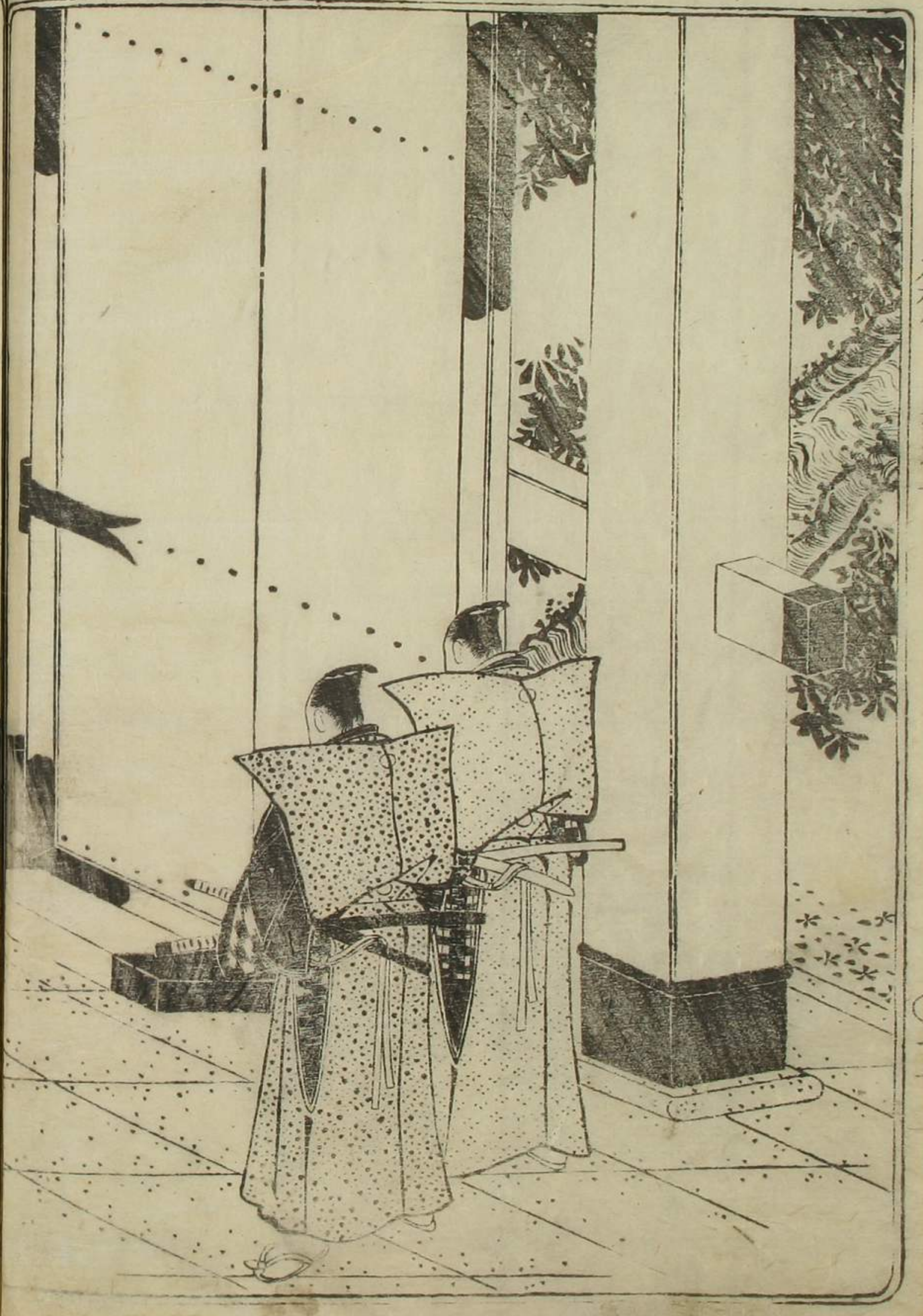
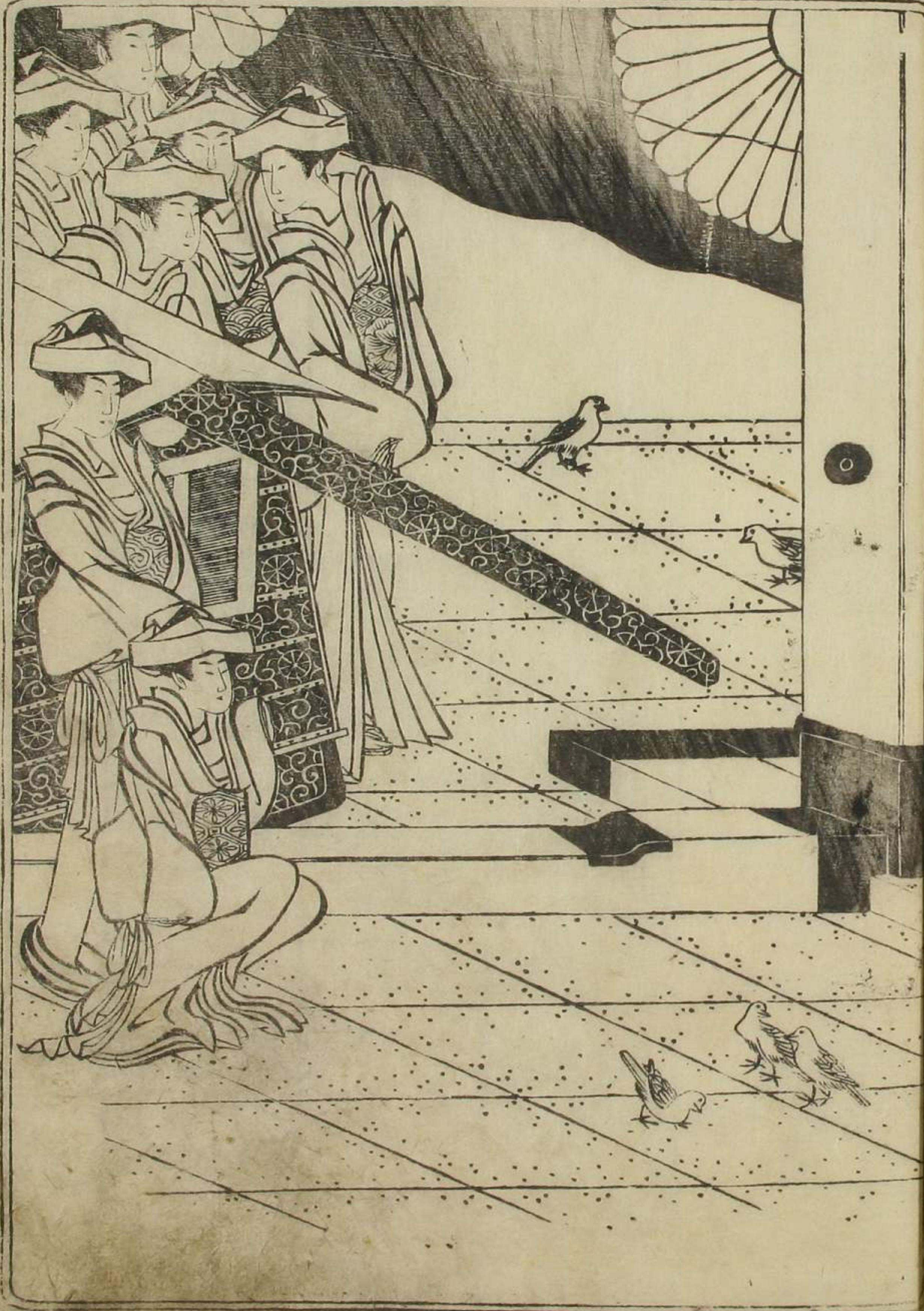
91-2157

のおぼんとさふ。雪のいと高くふける日、便殿より出御おぼ
 今のおぼとく香爐峯の雪、如何と詔ありける。玉座に侍つ
 ける公卿衆、いよぞ天意を會せどして、志む一躊躇後よりし
 も。官女清少納言、いちとやく起て、玉簾を褰けあげらほし
 故事と符節を合せたる頓智あり、そよハ女流こそハ少人
 今昔といハかともども、とろともふその才惠ハ妙なる。例に
 ひきて稱賛たまへば、頭殿まといし御氣色うるハ、其
 中、阿蘇松女ちかくめこそ、いとく出来せまどの上
 意よて、差換の御佩刀を御手げら賜り、渠が發明を
 ぞ賞したすふ。よき小よりて阿蘇松女ハ、こからず面目を
 ほどこし、りんさよば、事ハ聞傳て、御供前のうちよりハ

兎姓酒よ来り阿蘇松よあひて、賀儀を演る人も多かり
 流ぬ小我威が震る荒尾虎橋は、どり残人の傍輩共
 ハ、こまうため、壓倒きて、個々色やういひ、萎々として
 いと羞澁黙し居たり。那の荒尾虎橋ハ自来、肚裏悲死人小
 て、日比阿蘇松と睦まじうらぬへ、今しも偶と上首屋
 女出来一拜賜せしおんぞ、いと誇りあるあの面は、さこそ
 悪沮けをと。たよりかねて、旁輩よびりひ、適間君侯の御意小
 香爐峯の雪ハ、いふと仰せしハ、禪家のをぬる問答と云もの
 ぬると、阿蘇松女、誤心得て、簾子ハ捲せらも、いハ偶中
 といふものなり。か、いふけもど君侯よも、そと出来せま
 御恩賞ハ底事ど、かの清女が簾まされしハ、雪よて詩の意

かかへて、今日の御前ごぜんの花はななり。樂天らくてんが詩うたも香爐かうろ峯のねの花
 といはず。かゝる齟齬そごよてあせしハ、ババ鹿相しかあひまといふもの
 そまが物怪ものけの僥倖えんじんとぞ。不意ふい首尾しゆびせしハ、察さつをとるこころが
 夫つまハ龍陽りゆうやうの肚裏はらあるや、胡論ころんは執成しやくじやうよりとま。這奴こいつハ悦よろこ
 ませたるものからん。物ものどて佩刀はいとうハ下くだとろくハ、一番いちばん鎗やハ一番いちばん登のぼ
 うのときふこそあつべけ。但たゞ外がわハたがしめしめあつこととさる
 奴やつ己おのれハ分際ぶんげいとも弁べんまへど、御辞退ごじたいより寸法すんぽうもあつぬ。默呆もくたう、
 何なにハともあも。雪ゆきと花はなの區別くわつべつと、不ふ會かい得た文盲ぶんまうの不ふど、傍疼はうたうし
 と。苦くる晒あ奴やつハかせバ、餘あまの児こ姓せいどもも執しやく妬ねくかりふよりふて、汝なんぢ相あひま
 余あま唱な朝あさと謝あまる小こど、阿蘇あそ松まつハいとどうち羞はづらひ、不ふどし汗あせわ
 める心地こころちハ、蝸牛こくわいの角つのめだちて。こが上うへよりおたり天あまといと
 志こころき主君まぬしハあしとまふ罵ののせてハ、あら勿な休やすふしと。ほつしと
 とくそいで、今いま虎とら橘たちぬしの仰おほ寸すんところ一いつと知していまどその二ふ
 奴やつ志こころらぬといふものなり。如何いかふとふまバ、おほよそ風流ふうりゆうの道みちハ
 詩うたも歌うたも雪ゆきハ花はなハ比ひらへ。花はなハ雪ゆきハどうましとこそ幽ゆう
 玄げんまる風趣ふうしゆとも承うけハ、其その法はふを。一いつくその例れいハ引ひていこんハ、其その
 數かずハさああるべからず。たゞその最膾炙さいわいしやく人口くちおるものハ、擧あ
 てヤさん唐詩たうしハ去歲きょさい薊南けいなん梅うめ似に雪ゆき今年けんねん薊北けいぺい雪ゆき如ごと梅うめ櫻さくら
 ちる木きの下した風かぜハ寒さむからでそらにちるまぬ雪ゆきぞふりける。雪ゆきハ
 少すくぬ。おぬ奴やつ花はなとい、あまりぬる俚言俗趣りげんぞくしゆよて、いづくふおし志
 ろも味あじいひの侍さむらいるや、いっふやいっふと、こちふたのふおと。ど
 しハ硬かた猾はつき虎とら橘たちるまども、一句いちくの下したハいひこめらま。たち

菊池家の
 側室雲居の
 方香火院
 水禪寺の法
 會より来て
 たすこの侍
 女も雪白
 の衣裳と襲
 させたよ



菊池家の
 側室雲居の
 方香火院
 水禪寺の法
 會より来て
 たすこの侍
 女も雪白
 の衣裳と襲
 させたよ

まち收と消て頓口無言おほえど報しその面は猿の尻
ふさもふらう。自来ふの房裏におくまうたる所をかばかく
論口ふおふおといへども。別室よのしのおま死きてふまどり
き。短氣烈火火のごと死荒尾虎捕ふのとき奴心頭より起て
憤得て毒火沸かえまべ。いっふもふて這奴が過失奴見あ
ら。又候喧嘩奴仕つけまたかよお擲此の氣奴出えん
と。多方計較は。彷徨とつてありける。偶と阿蘇松が佩
刀の置所法よとづきてさし出たる奴見より。最究竟ごさん
ふま。と。那邊奴死とぐるふらきて阿蘇松が佩刀奴あしに
まうせて蹴ちらせ。佩刀はそのさく瓦落々と轉さたる。と
餘の兒姓まと手して刎飛せば壁は礎で割刺と音まへん

手たきて関とこらふ。阿蘇松慌ふま奴把ておしいた。死
倘こそ恩賜の佩刀おせ。おのまやとつ活ねくべきと。肚
裏よ悲おしへども。態と面奴和らげ。縮めてぞ居たり。虎
橋の案よ相違し。いりよ柔弱者ふもせよ。佩刀奴蹴らまてよ
も黙止ていあるま。その咎めひくる奴待て。刀の置やう式
小遊をしと。尾鱗奴はけて罵志を辱しめ。あはよくバ
眼よ物とせんぞと。巧まねもひし。そのかいなく。今かくたさ
やうりとぎたる。舉動。原来這奴生を付たる臆病漢よし。そ
つふんその内。驚奴見をうし。やとら居丈高小ふ。て阿蘇
松奴屹と睨まへ。おのまはいひ甲斐ふき。蠢東西うふま。この
壯夫なりせば。武士の精神とつぬる。佩刀奴蹴らまて。半晌も

猶豫すべきや。我今かく無礼なかせども。起りがて敵對せぬ。あの虎橋が怖まひり。何ふもせよ。おれ不辨菽麥の委實か。と。飽まで嘔きとづか。いびといへども。阿蘇松ハ聲のごとく。あつらふんと。躰まき居て。いさか。しとら。あ。ね。バ。虎橋。よ。と。欺。負。お。の。ま。の。腐。儒。者。が。孩。児。世。喬。の。洒。家。よ。向。て。い。う。て。相。闘。な。え。せん。お。の。生。白。け。た。る。志。や。面。ハ。と。罵。も。あ。へ。ず。扇。子。逆。手。ふ。ら。り。て。阿。蘇。松。が。腮。ふ。あ。て。仰。ひ。け。嘔。吐。と。唾。吐。け。い。言。語。道。斷。の。狼。藉。か。と。ども。官。城。阿。蘇。松。ハ。天。の。縦。せ。る。寛。厚。の。性。か。ま。ば。さ。く。こ。そ。一。生。懸。命。の。期。か。ま。倘。御。供。前。に。聞。が。し。私。闘。は。身。が。果。さ。ば。屍。の。上。は。耻。の。こ。と。さん。鬼。よ。かく。堪。忍。を。る。ふ。あ。り。ず。と。胸。の。忿。懣。が。い。鎮。り。か。い。と。づ。め。虎。橋。

ぬ。い。ふ。い。あ。や。り。ふ。る。雜。言。う。か。無。礼。戯。も。場。所。ふ。ら。べ。し。這。里。ハ。御。供。と。さ。小。侍。と。ち。と。ハ。御。遠。慮。あ。ら。べ。し。と。側。首。背。向。鼻。紙。と。う。で。唾。ぬ。く。へ。る。い。と。老。趣。き。舉。動。な。り。虎。橋。ハ。呆。ま。う。つ。り。げ。よ。一。向。の。烏。龜。め。己。が。悻。怯。が。掩。い。ん。と。て。事。は。虚。托。あ。ら。う。ら。め。と。い。い。見。く。び。り。や。と。ま。阿。蘇。松。御。供。と。死。の。和。玉。よ。か。ら。い。ふ。う。か。ふ。殿。堂。よ。て。お。も。を。と。ま。ご。よ。耻。辱。な。う。け。は。ち。も。括。と。し。と。も。お。も。ハ。ず。と。が。無。礼。が。得。咎。め。ぬ。い。沙。汰。の。か。ご。り。の。鄙。萎。女。の。腐。は。と。ろ。ふ。も。劣。ま。り。そ。ま。お。ふ。ん。ぞ。や。日。比。汝。が。父。廉。助。が。嘴。く。が。聞。く。小。几。武。士。こ。ろ。も。の。平。生。ハ。文。道。よ。て。身。が。脩。む。ま。ど。も。ま。さ。さ。り。と。あ。つ。て。の。君。の。馬。前。よ。て。大。敵。が。う。ち。擡。き。粉。骨。が。は。く。さん。よ。ハ。武。

藝こそ肝要かまると。ほねよ刀法鎗術の用心な訓と
 よし、聞と見とい、裏表今この弱息が臆病な見をば。
 廉助とて高の志をた木葉武者驚破敵ととる時ハ
 瓦多くくと戦出し。たちまち見崩して。一番逃走るハ
 治定なり。武士の風上よもあつとぬ族よて。禄賊ともしよ
 べいと。出放題なる悪口雑言このと死にいたり。阿蘇松ハ
 所謂堪忍囊の緒なきらし。不どしたずりあへどして。た
 びえど髪毛天さま小堅敦圍あいて。適間より御坐ちうれと
 憚用捨ておければはきわがり。方量しふき無礼の段々。武士の
 魂は土足ふけ。剩とへ人の面が巷とく。思多も君がとにし
 父ハ種々の悪名はけけいで。人面獸心の國賊りと思ふ
 さよ罵うへ。もとや聞そとてハ一分たす。弓矢八幡ゆると
 まし。いざ尋常は勝負せよと。飛走とつて身がまえせーが。や
 よ待虎橋汝と。今這里よて討果さハ。大切の御法會といひ
 消淨の道場は血が落さんハ。思をあま互よ死ても不忠の遺
 恨いつそ明日壺井の松林よて。潔く勝負が変し。本事の
 ほどな見をべいと語はぐハ。虎橋呵々とうちとらひ。放屁
 阿蘇松ふんぢこの場なひ脱て。今宵のうら小逐電せんさ
 肚裏。その手ハ喰ぬぞ。逃バとて小がさうう。真の武士の刃の味一太
 かうけて塩梅よと。佩刀をさうりと。殺さふ。たどりあがつて阿
 蘇松が真甲うがけ。売竹割と切はけと。明晃々志とる刃の
 ひり。已よ咄嗟と見えたるが。當下阿蘇松飛鳥のごとく虚

閃一閃とかがし。扇子がもつて丁ど打つ。佩刀のからりとねち
 たまけり。並居見姓等こまが看て大半虎橋よ荷擔とは。
 阿蘇松が中にとり圍芽むねの鉞脱はまこ。八方より討て
 かる。阿蘇松賺さす。落たる刀把手も見せず。虎橋が短刀
 小てうちびふね斜ひよとひちぢへて。那の剛敵の虎橋とやと
 一声。大袈裟よ劈斃せば。鮮血煞と流して。紅梅伴の紅梅の
 花がちらせるごとくお了。よの騷動おほうたおらず。瞬くうち
 小人影馳あはゆる。矢庭よ阿蘇松がひきをへ。血刀もたより。
 屏風もてとり圍嚴重よ警固なまし。まゝ一頭よハ乱騷ぐる
 兇性どもが欄住ことごとく手囚ふまゝ。菊池殿のよし
 聞し召おほき小驚うせたまひ。そのまゝ阿蘇松が甚察役の
 者よあはけけらと。縁故が委細問糺さしめたまふ。頭殿よ
 いぢる不意の椿事いできて。饗膳いまた央ふらざる小掃
 興したまへ。忙しく供觸がはたへいそだ寺門が立出ら
 せ。歸駕が促がし。送ひける

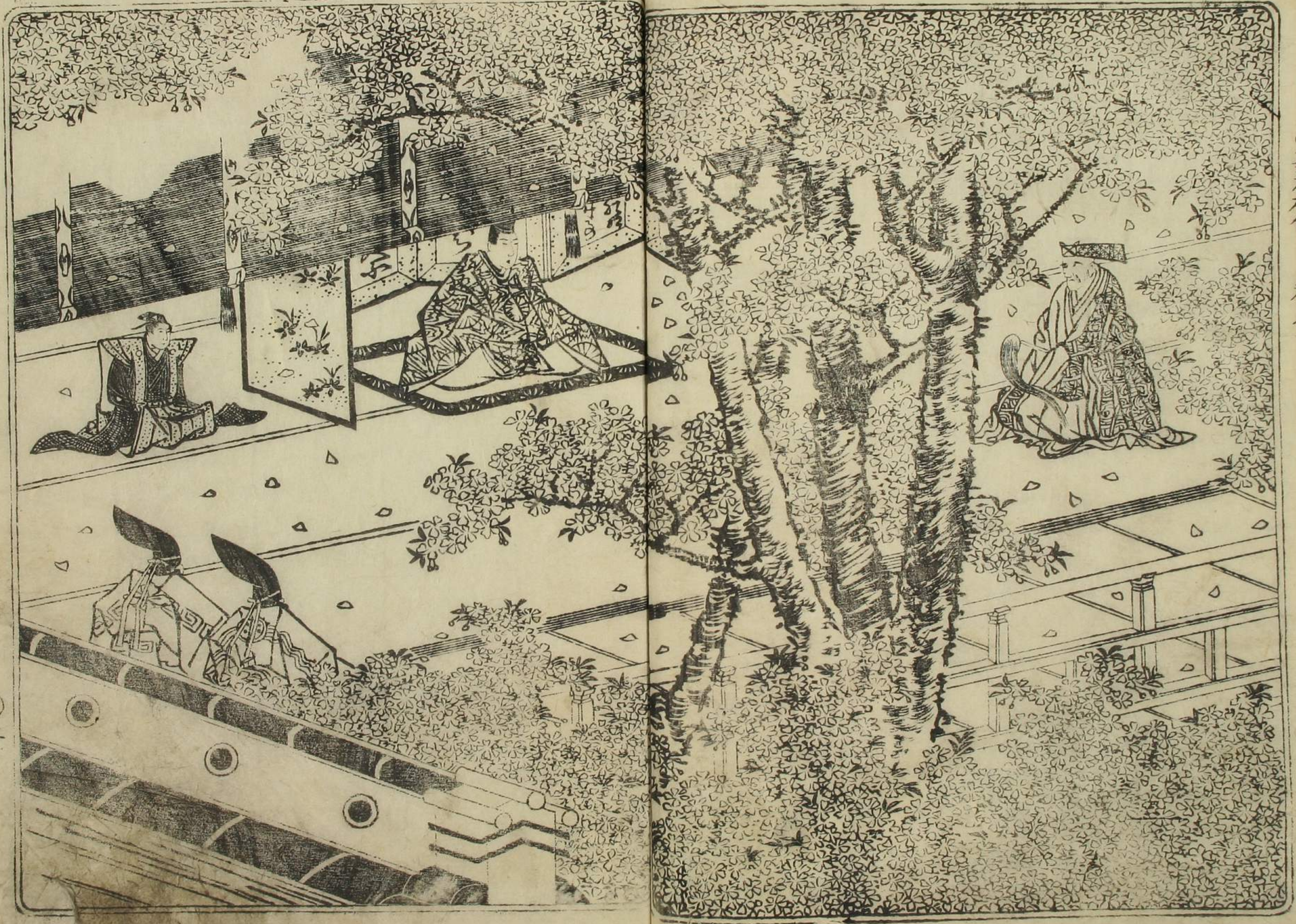
〇三回 鶺鴒

名たるる月の。痴雲のためよひつては失ひ。色ゆく花の。
 狂風よ香がひるしうす。美玉碎けやとく。甘泉竭
 やと。とるほじ小勘察夫の人々ハ荒尾虎橋。宮城阿
 蘇松。刃傷の一作。逐一は査糾がとげ一千人の口單と
 まぢめさせて。執政吉弘市正よさし出。ぬは詳よ
 事の容子が申て。その發落をぞあいまちける。吉弘市

正あまを以て聞て頃も裁断ともふしうぬ。執左思右想も。
 初虎橋よりあつけたる喧嘩も。ふと小種々の雑言と
 吐き。刺さへ上の事よごまうせし。一条。國老の嫡々小の
 似げあき不敬。さきど今その人死せし上は別罪
 だ問べきよしもなし。まご阿蘇松ハ最止事以得ず
 去て討果せしけぬまば。その罪軽き小似たまども。
 同僚は殺害せしめと明白なり。まご故に式目小據
 て。喧嘩両成敗とし。阿蘇松とバ武法小まうせて。自盡
 ふさあめん小い。さあらバ公正なる制度からん。あつたり
 まつたりと計較し強めて。詰朝御館は出仕おなし。
 君侯は見え言上るやうい。昨十八日御香火院の御法

進よたいて。荒尾虎橋宮城阿蘇松ハ傷の儀精細し
 明はりまつ。律例は查侍べるよ。如此の定法と一般に
 得へ。虎橋ハ屍ハその父彌平左衛門下さま。葬式を免
 又阿蘇松儀ハ古例のおとく。賜劔おせつけらまよ
 かるべくい。いんうと伺ひ。菊池左馬頭殿さまを聞
 せらま。勿地御氣色かり。御顔色真青。ま筋くまたら
 て。御眸いと鋭。見えさせたまひ。市正ぐ。まごいひ果
 るよつと起て。奥ふりく。駈入たよ。市正ハの御光景ハ
 見ると。果よて半响口は開かず。こま全く君侯の
 御心小ハ阿蘇松ハ助けなく思召ゆえなりと。猜し
 由へ自来忠直の人ぬま。まご裁判の未熟なることま

池上の花と
 賞して菊池
 殿香爐峰
 の雪ハハ
 呼びた
 羣臣の意
 解せず阿
 蘇松いそ
 ぎと悟
 茶道と
 簾子の捲
 き



池上
 卷之一

池上
 卷之一

知^ちる且^{かつ}ち且^{かつ}おそま^まそのま^ま御^ご殿^{てん}なまり人^{ひと}出^で私^し衛^ゑ
小^こ田^たしてしるど^ど寝^ね食^{じき}なやとんせず、多^た方^{ほう}あ人^{ひと}じ
こづらひりらぐいつま君^{きみ}彦^{ひこ}の御^ご内^{ない}意^いなうか^かがひ見^みんと^と数^{たひ}回^{かい}
出^で仕^しなぬせとも、とま^まにける幹^{かん}辨^{べん}ともいつも御^ご不^ふ例^{れい}と
このま^まいつごと^と御^ご逢^ああることふし、ふま^まふよりて^て掾^{せん}吏^しの
ものぬして、夥^{おほ}の帳^{ちやう}簿^ぼな閱^{くわ}せ、その例^{れい}やあると、只^{ただ}顧^こ
穿^{せん}鑿^{さく}とま^まとも、別^{べつ}よとせざる異^い議^ぎもかけま^まば、市^{いち}止^とま
とく叫^こ苦^く、眉^{まゆ}頭^{かぶ}卧^ふ蝨^しな起^たし来^き、とま^まか^かうと^と肉
肝^{かん}膽^{たん}な惱^なま^まし、齒^はなさへいたむるど^どくりぬるま、おの夜^よ
一^{ひと}夜^よおもひ躊^{ちゆう}躇^{ちゆう}てあもぬらま^ます、獨^{ひとり}燭^{そく}な焚^たし且^{かつ}は
待^{まち}くらり、猛^{まう}然^{ぜん}手^て段^{だん}なおもひはきたるま、おの手^て段^{だん}とい^い御^ご
側^{わき}室^{むろ}雲^{うん}居^きの方^{かた}の世^よは勝^{かち}をたる怜^{あは}れ^れの性^{さが}なりな聞^き知^ちり
居^きよど、ふま^まよ便^{べん}て私^し下^かより君^{きみ}の所^{ところ}思^{おも}ひ規^きひ聞^きやと
ひそりに廣^{ひろ}敷^{しき}小^こ手^て蔓^{むす}な索^{さく}めて、そのふとぬいひあそ^そ
啼^な、頼^{たの}ま^まけま^まば、御^ご側^{わき}室^{むろ}ふも快^たくうけひきたまひける、
おのゆへ菊^{きく}池^ち殿^{でん}蘭^{らん}房^{ぼう}へ入^いらせたま^まよ、雲^{うん}居^きの方^{かた}百^{ひゃく}般^{ぱん}
心^{こころ}な費^ひやして豫^よけり設^{せつ}なうと^と美^ひ酒^{しゆ}佳^か有^{ゆう}はさらるる、
吹^ふ彈^{たん}の興^{きやう}なとへ催^{もよほ}させたまひ、御^ご機^き嫌^{げん}うるハ^ハく見^みえ
させたま^まより、御^ご話^わの蔓^{むす}よほきて、過^とし^しある児^こ姓^{せい}供^{こう}
の事^{こと}あ^あし^しぐ、對^{たい}手^て阿^あ蘇^そ松^{しょう}い^いう^うなる御^ご所^{ところ}置^ちより行^いふ
はせたまひしと、何^{なに}氣^げな^なくら問^と見^みた^たま^ま頭^{かぶ}殿^{でん}きま^まし^しめ
さま、それば、いまど何^{なに}とも家^か老^{らう}どもより、申^{まを}出^しどとば^ばり

仰せて、まゝ餘の御話、轉て止む。そをより君成らせ
たまふと云ふ。雲居の方。とりふふきておのこゝに、規がひ
たまへば、いつもたふし御應なりた。一夕、雲居の御方、君に
向てせたまひて、妾ふとねもひ出せし。おとのこへる。妾が
郷貫の知りぬすおとく豊後の府内にて侍らる。妾いまだ
いとけぬきと死の事にて。國司大友右近將監とよへ近習
が勤りし。高階源藏とよふものゝとよらひしが、恰ど此度の
おとく互は意氣地の論口より、おの源藏當坐よ一人と斫
殺し三人は傷はけし。巡檢の吏役拘到て、縁故を精く
紀明せし。源藏もとり二ねき忠直のしおて、私なく
奉仕ける由へ、那の邪人ども、君の御前よりしと姫と下
城の途に待ふせ。不意討小せんとして、反て渠がためよ言
をとりつこと、證據分明なるふより、國司の御裁判よ、那
源藏小百兩の首價を出させ、おを以吊ひ料として、死
者の妻子ふくごとき、残の者どもは、御叱よて結案侍り
ぬと、泣むらふものかたらひたまへば、菊池殿聽了てのこ
ナハよ、バ、呼その判断、いまだ宜きよ、慥さよといふべうらす
喧嘩両成敗といふまといへ、古よりの武法よありを、や、雲居の
が膝、おをとり、それにてその源藏へハ切腹おさせはけらる
る。殿御頭、お綽せたまひ、否く、卿のようさろく通なまは、
その源藏とやらん誠忠無二の者なるべし。さまは、その思
臣、欺殺よせんとせし。悪黨等と、一般に裁許するべし。

源藏傳 卷之二

い事よ聞しと世よ誦らま。臣たるもの心を以て見。以来
忠義を励むのあらど。雲居の方いしあやま。とあまは
源藏の御助も。とふが御政道よ。かひとべるふや。殿
仰すらく。まららずは。ぐりよ。ごご。助けて。國法
た。がたし。予。づ。たり。旨。その源藏とやらん。勘當
まで。領内。か。まい。追放せしめ。死者。名跡。と。た。つり
荷擔の者等。ハ急度叱。過て。改。び。べき。利解。と。か
を。ませ。かん。かく。せ。ハ。大概。寛仁の制度。たる。べし。雲居の
方。の。御。旨。ハ。聞。て。暗。々。地。より。お。び。また。し。四。表。八。表。の
御。か。た。ら。い。お。び。て。その。夜。ハ。こ。き。て。帳。内。も。ま。り。や。り。り
し。と。ぞ。吉。弘。市。正。ハ。雲。居。の。方。より。御。内。意。ハ。は。た。へ。聞
よ。ろ。ろ。づ。と。か。き。ま。ふ。し。かく。て。市。正。ハ。誥。且。御。館。よ。出。仕
か。し。執。謁。ハ。願。け。ま。バ。ハ。ち。早。御。召。出。し。り。り。り。市。正
ハ。御。側。室。の。内。意。ハ。含。て。宮。城。阿。蘇。松。追。放。の。こと。と。窺。い
た。て。ま。け。ま。バ。菊。池。殿。た。や。と。く。御。聞。と。ま。ら。せ。ら。ま。ま。り
ろ。ろ。ら。へ。との。御。誼。お。び。市。正。慎。て。承。ハ。ま。その。ま。し。ふ。の。由。と
役。筋。ハ。申。渡。し。ぬ。市。正。ハ。こ。し。もの。疑。獄。の。頓。々。結。案。よ。お
ま。し。ハ。ひ。と。ハ。雲。居。の。方。の。御。庇。お。び。ま。か。た。け。お。く
た。も。ひ。且。その。發明。ハ。感。ド。ける。その。後。菊。池。殿。斐
翠。帳。へ。入。う。せ。ら。ま。御。機。嫌。よ。く。や。雲。居。か。の。阿。蘇。松
と。ハ。長。の。暇。ハ。と。らせ。追。放。せ。し。ぞ。前。日。卿。ハ。虚。談。く
出。來。た。ま。と。仰。せ。ら。ま。け。る。と。ぞ。と。て。この。菊。池。殿。ハ。い。ふ。れ

菊池殿

市正

ハカ、まて阿蘇松が助けたくねほせしと、其奥意よく
ハ、く原ぬまバ、ひまより先、菊池殿水禪寺の智遠慧
長老がまぬらせらま、密よまま、内意がおほせらま、近
臣どもの相が看せしめたまふよ、長老一々看がていへらく
個とも骨法凡庸ふとべも、そまが中よ、宮城阿蘇松の
希代の神相よて、その前途たのもしくおしひとへる、渠へ
王佐の才が具したる人傑よて、後來世が濟ひ國が利し
天下の至寶とぬるべきものなり、さまごとも惜べ、一個の
欠穴ありて、十四五歳の際、不意災星よあひて、かどし
一命も保ちかたらん、倘天幸が得て、よの大難がどよ
免うまたらま、か、渠が功名成就とべきふと、密よ
嗟嘆がせらまける、菊池殿仰すやうさあらハ如何小
まて助てま、長老拂子とりぬほし、天機洩とべからず
とを應らまける、菊池殿このとき長老の箒語が記
得居たまひて、年頃試見たまふ、近臣等が身の上の吉
凶、此由違ハずして、符節があハをるがぶとくぬり、旧より
志うあるべきとづり、那の慧長老といへるハ、震且國揚子江
ふる金山寺よて修煉せらま、高僧よて、風鑑ふり、ま
た比ぬく人の禍福が指すま、淵鑑がぶと、一、ぬん
あまふよりて、菊池殿ハ、あ、の田、阿蘇松が事起し
とき、渠が齡丁と十五歳ふる由へ、長老の風鑑、その驗
あること、神のごくぬるが感服したまひ、世の利益の爲

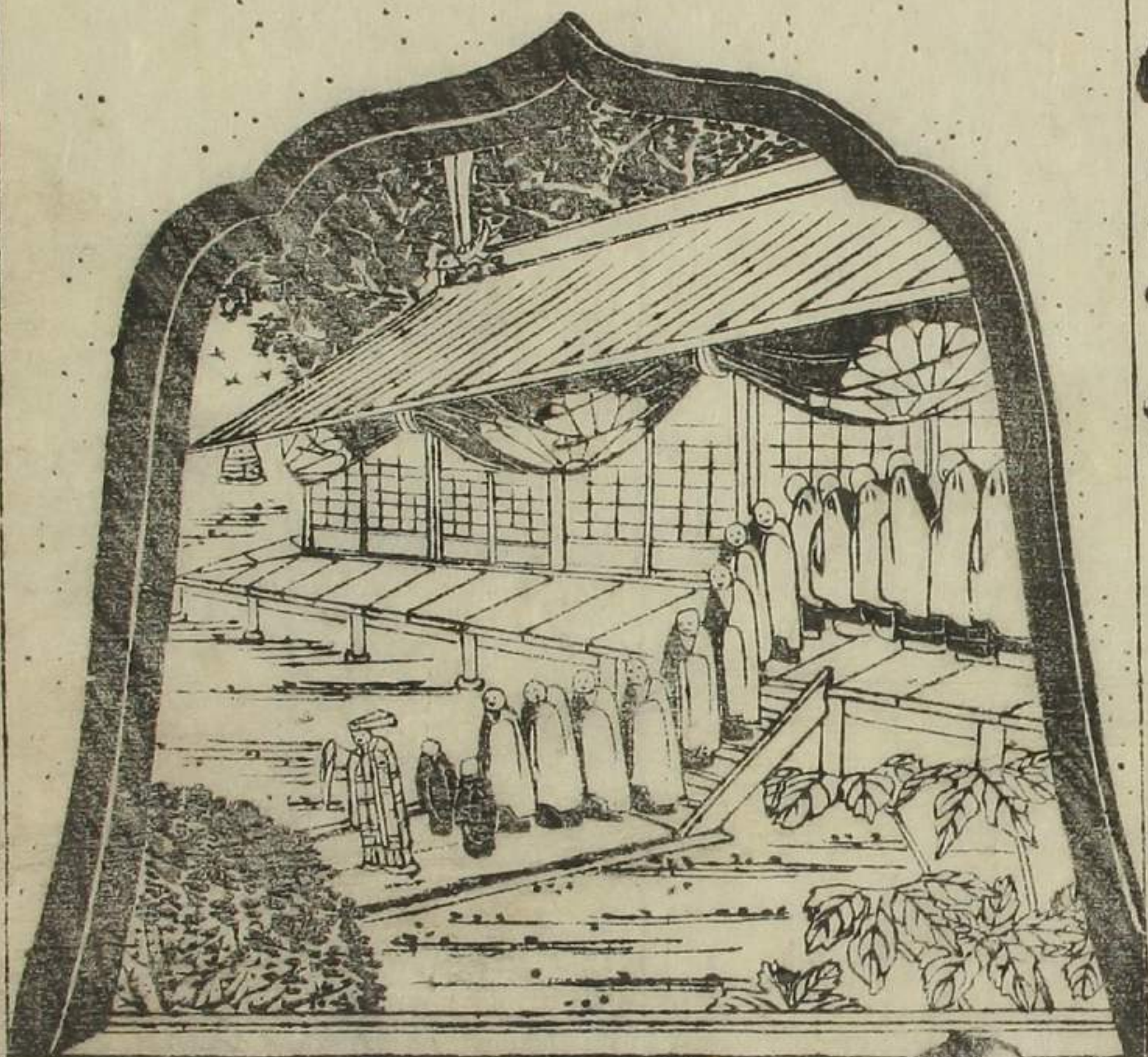
阿蘇松 卷之二 四

成かざりし。幸ちて助けとらせたまひし。依估おこ
 ころ明白よて。私よその徳果に貪たまぬ。證據ハ御
 膝下よ召使しとす。自國の利益のため小志たまはざる
 小てしかる知るべし。久後おいたる。あの阿蘇松。駒澤某
 と喚び。非常の功蹟にたて。その名に海内よ震ひし時。
 菊池殿。いとめて市正ふかくと明とせたまひし。こそと死
 の夜雲居の方へおほせらと。御話といひ類なき賢明の
 君かまうし。そと虎豹の兎いまだ文をかさず。いへ共
 とや牛に食の氣勢あり。さるやどふ。勘察衙門よ囚こ
 めかうきたる。宮城阿蘇松ハ。志かく人殺せしうへ。露
 ばう。命のむいらんとおりの。未練の心いふけきと。大
 罪城犯せし身。私よ死路に求むるハ。上への恐怖かたよ
 志もわらず。しや。公裁にまちて。嚴科小處せらるべしと
 とくより。髻にむらとせ。最後の觀念。潔よくぞ見之小ける
 浩所よ上使入来て。君の嚴命に演追放仰にけらる
 旨いひこせ。たぢち小護送の健卒ども。無刃の阿蘇松と
 ひつたて出づ。阿蘇松よゆめおもひもぐけず。からと露命と助
 かまう。がとや除名の身の。うち萎まはく。まの衙門とそたら
 出ける。ゆくりねき行路の人。もふの光景に。見て總て哀を催せり
 かくて阿蘇松ハ。行こと十丁あまり。おして。官橋の上より。廻り
 御館の覺に望んで。拜にふし。君の大恩に謝した。こころ
 正しく再生の父母なりと。感激涙堰あへず。その期ふふ。い

阿蘇松 卷之一

十四

荒尾虎橋
 同僚官城
 阿蘇松が
 寵遇あつ
 死をねな
 事よ托つ
 無礼とほ
 多方悪口
 吐て罵辱
 り逐ふ大
 榎事と意
 出ま



夫の宗親ありて



夫の宗親ありて



阿蘇松が

〇十五

〇十五

ても嫡親嫡母なご一目だも遇まくおもへど、こころも遂くぬ
時機おもはげよ武士の上など悲しきものハあらとこたげ
女々ましくも涙うちかき。彼三閭太夫が澤畔よ吟行ふち
とて、ほどぬく菊池の城下ぬかきける。東の郊坳ふる分界
堆子ぬかきまゐる例よや。警送の健卒どもハ這里より、阿
蘇松ぬかき放ちていつ回ぬ。阿蘇松ハ屠所の羊のおもひ
ぬかき、徐々とたどりけく。やがて岐ふす路の邊の石敢當小
ちうづき。但見まは妻手ぬる緑叢樹の透間より、一道の茶
の烟たちかびきていと冷静たる荒廟をあらはしたる那方
よりむらしとたちいで、阿蘇松ぬかき批とぬり、別まぬ
惜めるともがらハ日比親しぬかきまよて、適間より集

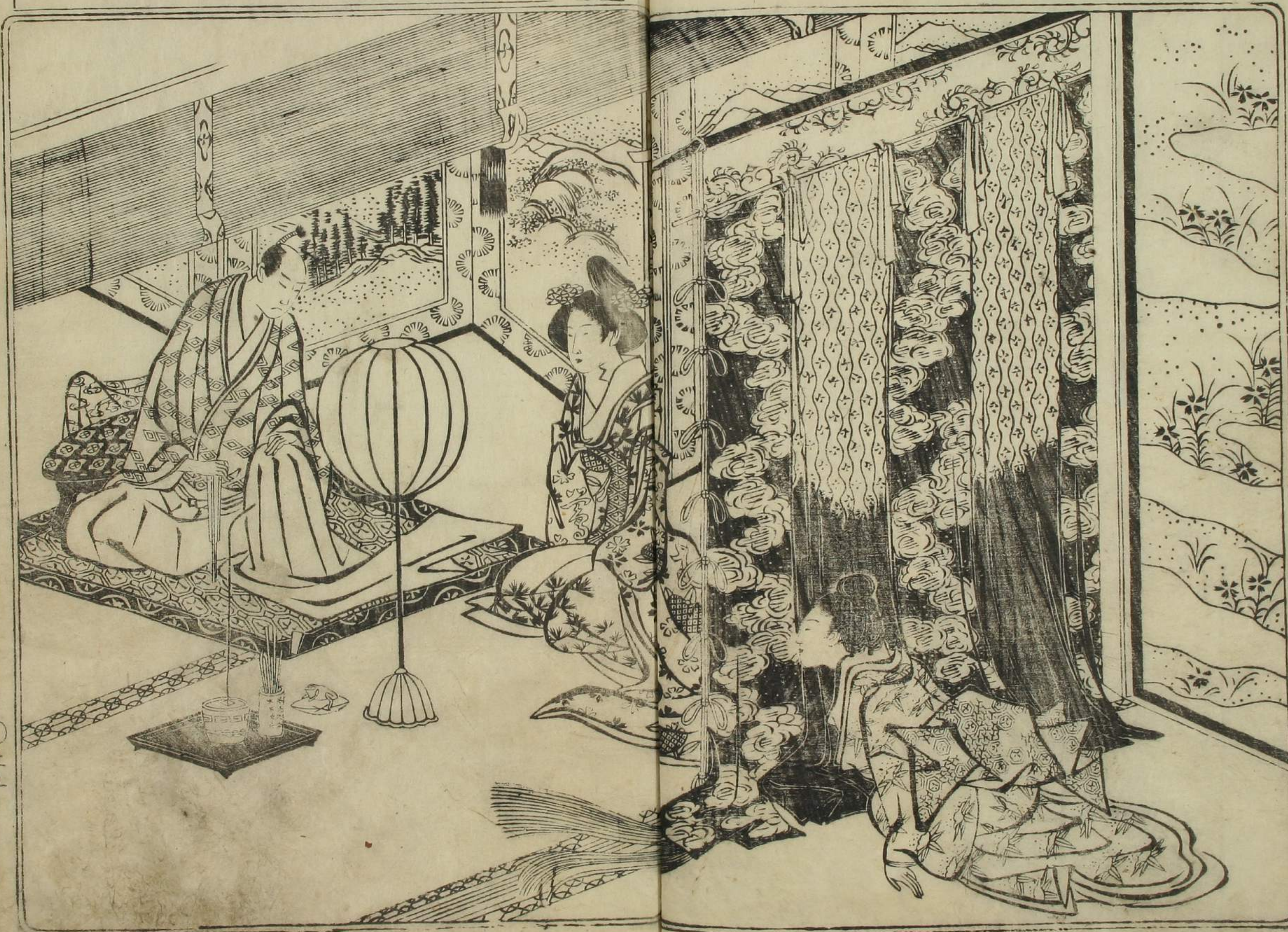
合居て起程ぬかき見送るよぞおもえたるさきど骨肉のものどもハ
上ぬかきかして出で来らざるふ。阿蘇松ハ人々小請
まて。茶店小尻うちかけ離盃ぬかきかハまほど小後馳
ふとせつきたる從者がさし出せる花布の袱包ぬかきぬ
袷うち着て、まき旅装ぬかき。差替の双刀ぬかき佩て。
編笠ぬかき左小もち。こやこりまぬかき告げてうつ起ハ個々涙
の袂ぬかきこりちける。宮城阿蘇松をまよひたもの東ぬ
さして歩行けるが。阿蘇の御嶽ハ道の便といひ所願も
あまばいご詣でむやと。峻しき羊腸ぬかきのぼまつ。ねよそ
麓より半腹まてハ。百千萬億古木たちこめて。そまハ間
間ハ山櫻どものとれたまどまたるが花ハまふちアきて。

安花加果 巻之三

ふぐりのかきめる嫩のふどその浅翠なる小のどりぬる
 影さしていとまむりし斜風うちそよよをその葉末の
 滴は抽ぬ濕寸。まの昨の雨の記念ふるべし。蘿はすま
 梯は攀て辛じて宮屋はいたまはきぬ。葦地は
 粘印たる花片は残香ふなありやふしや。えし
 まぬ鳥ども。むをほくさへづもども。樹かくきて人
 ちりよらす。深窓はどろしと岩激泉鳴嘒ぐ。石
 の華表は幾個うたえ来つ。長命燈も不のありて。さ
 とつ小神くま。聴て岳廟は進香廡下の砂地は
 額杖突き祝詞して賽はなかせば。ふりから神樂の
 音さへ研していとすゞしげぬ。心ゆくや小をさす

徘徊けるが例の詩の口裏は衝いづるま。小腰は佩ひ
 たる墨斗とろで。柄短き毫して瑞籬の瀑たる間に
 題つけぬ。這方の大官司は姻族をかま。やをら尋いたま。バ
 卯の花の垣根は戯遊る。男の童の阿菰松は熟面たる。バ
 なが一目見るより。そのゆく驅入てふまは案内官司忙ハ
 まく出むりへて正廳は請し。闔門たうりて款待ぐる。積る
 説話よその夜いといたり更て。やうやく臥房は入ど。
 短夜のぬらひ。そやくも山鴉の啼きたる。夢さへ結び
 あへて。朝まどは起出で。粥かど啜完旅装ひ刷るひ。
 いとゆまうしてま出ま。官司親屬はも袖袂は纏りて
 拽とむ。阿菰松いへらく厚意かまけぬ侍もど。御勘

雲居の方
 長臣市正
 小たのめ
 殿の御成ご
 心なつやし
 て思姓阿
 横おご裁
 許の御内
 意とうか
 ひたし



安九加保
 卷之二

〇廿八

當の身の上おきよ一夜といへも御堅近死あたるに長居せ
 んへ思をふきよめらすし固推辞しよぞ。大家げは夫
 理よとおもへばさらふ苗人法もふくいと別をな惜
 けりかくて阿蘇松の宮司が宿なたちいづもに夜い巴
 明もふきたまど木だち深き山奥おきば天色ふは不
 のららし雲のたえ間の星輝も透見て岨路なぐらうと
 ある巖頭も立て老樹の隙より見たりせば有明月のおち
 かたよ菊池の御城とらぼく粉牆朦朧仄見けるよ多媽の
 在所ふま直も膝坐てふし拜ぬふもより先ハ山又山ふ
 こけいもバふをこそこが故郷の見終ふまともぐらよ腸
 瓜断おしひせよ刺脚下より山鶴の二声はりも啼たつ

も哀れをて。眼な志をたき。郭公ハ不如歸と
 啼しのと。こまの罪ある放逐の帰る由ねき身の上とく
 やと歎きつてもろともよ血のふいたとを墜しける。そ
 より宮城阿蘇松ハ重よへたつる山河ハ跋渉はくし
 つきして不どぬく豊後の國鶴崎といふ地方よいたま
 夫の湊よる便船なをてりちの里。一路順風潮日あ
 らずして周防の國降松の浦も着小ける。這里より大
 内殿の城下山口へハ早路ゆくところ小てとやその程も
 遠からすとねん。

あはる日記巻一 終

